丁抹国撫蘭仙

——明治初期の日本と小国デンマーク

ピーター・コーニツキー

今回のシンポジウムに当たり、『米欧回覧実記』を改めてめくってみて、私がどのような印象を受けたのかと言えば、どう見ても岩倉使節団の日程が実に忙しく、眩暈を覚えるぐらいであったということである。使節団のメンバーたちは、かなりのエネルギーや辛抱が必要だったのではないかと思い至った次第である。

なぜそのような日程にならなければならなかったのか。それにはいろいろ理由が考えられるが、目的地の多さが第一だろう。アメリカや、ヨーロッパの列強国イギリス、ドイツ、フランスだけでなく、ロシア、当時成立したばかりの統一国家イタリア、それからスウェーデン、デンマークにまで足を運んだわけである。それから、各国内でも目的地は多種多様で、病院、政府、博覧会、軍事・産業施設、銀行、郵便局と数え上げれば切りがない。つまり、各国の社会全般が回覧の目的となっていたので、必然的に忙しい日程になったと言えるのではないだろうか。

しかし、使節団がなぜ小国デンマークにまで足を運んだのか。わざわざそこまで行かなくてもよいのではないか。デンマークと言えば、現在はアンデルセンの童話とかレゴやサッカー選手などが、我々には非常に連想されやすい。ただ、小国デンマークと言っても、その我々のイメージが明治初期の段階でのイメージとかなり違うことに注意することが大切である。そのため、「小国デンマーク」と言うことが適当であるのかという疑問が当然出てくる。

まず1810年代まで遡ってみよう。その当時、デンマークはまだ数多くの植民地を所有していた。しかし、1814年に、ノルウェーがデンマークからスウェーデンに引き渡され、また1845年にセランポールとトランケバルというインドのデンマーク領がイギリスに売却され、ニコバル諸島が1868年にイギリス領となった。そのため、岩倉使節団のヨーロッパ巡覧の段階では、既にデンマークのアジア植民地はなくなっていた。

久米邦武は、そのような事情を十分に理解し、その概要を『米欧回覧実記』のデンマーク概観で詳しく述べている。久米は同箇所で、フェロー諸島、グリーンランド、アイスランド、西インド諸島がデンマーク領であったことに言及している（1917年に西インド諸島が、1944年にアイスランドがデンマークの支配下から離れ、2024年現在ではフェロー諸島とグリーンランドのみがデンマークの自治領となっている）。そのため、当時、明治初期の

事情を考えてみると、岩倉使節団がデンマークへ行ったのはそうおかしなことではなかったのではないかと思われる。つまり、デンマークもイギリスやフランスと同じように植民地を支配していたことは事実で、日本側もそれがわかっていたわけである。

岩倉使節団のデンマーク訪問の背景には、もう一つ考慮に入れなければならないことがあると思われる。日本とデンマークとの国交のことである。慶応3（1867）年に日丁修好通商航海条約が締結されて、それは幕府が外国と結んだ最後の条約となった。翌慶応4年には、横浜、函館、長崎、兵庫、大坂にそれぞれデンマークの領事館ができ、領事自体は最初オランダ人が務めていたものの、横浜の領事館は慶応4年版の『横浜明細全図』に初めて現れ、デンマークの国旗も描かれた。

実は、国交ができる前にも、デンマーク人は既に幕末の日本でかなり活躍していた。日本在留の代表的なデンマーク人はフレデリック・クレブス（Otto Frederick Krebs）という人物で、彼は生まれがデンマークであるが、高校を卒業してからスコットランドへ渡り、造船技師の教育を受け、それから幕府がスコットランドに蒸気船を3艘ほど注文したときに、クレブスが技師として、その一つに乗って来日した。その後、どういうわけかクレブスは国に帰らないで、アメリカのウォルシュ兄弟が日本で経営するウォルシュ商会に就職して、一生懸命に日本語を学ぼうとしたわけである（長島2007、398-401頁）。

三菱の創立者岩崎弥太郎が、当時ウォルシュ兄弟と頻繁に取引をしていたので、それがきっかけでクレブスは岩崎と知り合いになった。岩崎の日記を見ると、クレブスの名前が頻繁に登場する。明治6（1873）年5月にクレブスは三菱に入社して、鉱山機械方監督の肩書を得た。年間給料が300円で、当時としては非常に高い給料であった。後にクレブスは三菱の5人の取締役のうちの一人となった。非常に派手なキャリアと言わなければならないが、実は明治初期の三菱では数多くの外国人が働いていて、その中でもデンマーク人が特に多かったのである。それはおそらくクレブスの影響ではないかと考えられる。かいつまんで述べれば、岩倉使節団が明治6年4月にデンマークに足を踏み入れた時期までに、日本とデンマークとの国交は既に出来上がっていて、日本国内においてもデンマーク人が活躍していたということである（鈴木2000、9、14頁。三菱社史刊行会1979-1982、第1巻、162頁）。

次に、岩倉使節団のデンマーク訪問について簡単に説明したい。実はコペンハーゲン大学の長島要一先生が既に発表されたように、岩倉使節団のデンマーク滞在については、デンマーク国立文書館の資料や当時のコペンハーゲンの新聞などが『米欧回覧実記』に出てこない面白い事情を明らかにしているので、しばらくは長島先生の研究成果を踏まえて話を進めていきたい（Nagashima 2003, Nagashima 2012, 長島2007）。

使節団は、北欧、ロシアの訪問に際しては、使節団全員ではなく、たった11人しか参加しなかった。そのうち3人が留学生で、彼らは英語、フランス語、ロシア語の通訳として参加していたので、実際のメンバーは8人であった。使節団はドイツ北部の港町キールから、夜行の客船でデンマークに入国し、わずか5日間だけコペンハーゲンに滞在し

て、それからスウェーデンへ渡った。なお、イギリス、ドイツ、アメリカ、フランスなどと違い、日本人留学生がデンマークに居残ることはなかったので、一見すると小国デンマークはあまり重要視されなかったようであるが、果たして本当にそうだったのであろうか。その問題はしばらく置いて、まず使節団の行動を見ていこう。ちなみに、『米欧回覧実記』の記録は、当時のコペンハーゲンの新聞などの資料とつじつまが合わないところがあって、それはほとんどの場合、久米邦武の記憶違いではないかと思われる。

まず、明治6年4月18日に使節団がコペンハーゲン駅に到着して、ジュリエス・フレデリック・シック（Julius Frederik Sick）というデンマーク人が出迎えた。このシックという人物は、もともとデンマークの外交官で、明治3（1870）年にデンマーク国王の書簡を日本まで持っていき、明治天皇に謁見した際に天皇に手渡している。このことは、国家レベルでの接触も一応できていた人物ということを物語っている。それだけでなく、シックはデンマーク有数の電信会社と深い関係を持っていて、デンマーク型の富国強兵策を提唱していた。そのことについては後述する。

翌19日に使節団はデンマーク国王のところに行った。そして、フォーマルな国王謁見晩餐会が開催され、それから別の場所で国王・王妃夫妻と使節団の間で30分ほどの会話の時間があり、それがとても楽しかったと、珍しくも久米は『米欧回覧実記』に書いている。

しかしながら、それと比べても20日の行動のほうがずっと重要だったのではないかと私は思っている。20日は、まず博物館訪問である。デンマーク国立博物館では、最初にデンマークの植民地グリーンランド、アイスランド、フェロー諸島などの陳列品を観察し、結果としてデンマークが単なる小国でないこと、それからデンマーク本土にない資源がグリーンランドなどに豊かにあることを使節団が確認している。

次に、博物館の日本ギャラリーの方を見学すると、そこには陳列品が驚くほど多くあったと、久米は『米欧回覧実記』に書いている。それらは瀬戸物とか漆器、鎧、版画などで、香港在住のデンマーク総領事のブロックという人物が、幕末に手に入れたものということである。それらは今でも陳列してあるが、その真ん中に徳川家の三つ葉葵紋がついている豪華な乗り物があり、博物館に慶応3年に収蔵したという記録が残っている。それはおそらくパリ万国博覧会と関係があると思われるが、詳しいことはまだ資料が出ていないのでわからない。

そして同じ20日のことであるが、夜は使節団がコペンハーゲン市内の証券取引所の中にあった大北電信会社の本部を訪問し、その後、証券取引所の会場で晩餐会が開催された。それは、日本にとってもデンマークにとっても非常に有意義な機会だったと言わなければならない。大北電信会社と日本との関係についてはこれから詳しく話すが、その前に使節団の日程に戻ろう。

21日には使節団が軍事施設を観察したが、『米欧回覧実記』の22日の項目では、久米はデンマークでの観察経験を踏まえて、小国は独立を守るために軍事力が必要だと結論

づけている。国際政治の中、日本の事情も念頭に置いて、そのように書いたに違いない。そして、22日に市内見物をして、最後の23日に連絡船に乗ってスウェーデンへ向かって出発し、岩倉使節団のデンマーク訪問が終わったのである。

さて、20日の晩餐会のことに話を戻すが、晩餐会の場所は証券取引所で、同じ建物の中に大北電信会社の本部だけでなく、デンマークの最初の投資銀行の拠点もあり、それから晩餐会の担当者はカール・フレデリック・ティットゲン（Carl Frederik Tietgen）という人物だったのである。ティットゲンが担当者になったのは偶然とは考えられない。ティットゲンとはいかなる人物なのかと言うと、イギリスのマンチェスターで5年間ほど総合商社に勤務してから、帰国後卸専門の商社を設立して成功し、1857年にはデンマーク初の投資銀行の取締役になった。その後、明治元年に大北電信会社を設立したが、1870年代に砂糖生産会社、ビール醸造会社などいろいろな会社を設立して、とうとう当時のデンマーク産業界の大物となったというわけである。

さて、ここで大北電信会社のことを少し取り上げたい。大北電信会社設立の1867年の暮れに、会社がロシア政府からウラジオストクまでの電信線の建設及び運用の許可を受け、早速電信線を建設した。それから、1870年1月に大北支那日本拡張電信会社という支社を設立して、今度はウラジオストク—長崎間、及び長崎—上海間のケーブル敷設に取りかかった。つまり、デンマークの大北電信会社が、日本とヨーロッパを結ぶ電信ケーブル敷設を担当したわけで、それは経済的また政治的に大きな意味を持っていたのである（長島1995）。

先ほど述べたように、使節団のデンマーク入国のときに迎えに行ったのはシックという外交官であった。彼は大北電信会社の代表として、会社の電信線がロシアを横断してウラジオストクまで届くように、ロシア政府と交渉し、結局、許可をもらったのである。つまり、デンマークの外交官がデンマークの民間会社の代表という役割も同時に果たしていたのである。これは少々おかしなことであるが、これでヨーロッパと東アジアを結ぶ電信線の建設は、単なる民間業者の事業にとどまらず、国家レベルでの事業でもあったということが明らかになっていると言えるであろう。

その後、シックは大北支那日本拡張電信会社の理事長となった。シックが来日した目的は、前に言及したように、国王の書簡のポストマンという役割もあったが、実は、日本政府と交渉して電信線が問題なく日本まで届くようにするといった仕事のほうがメインだったのではないかと私は考えている。

シックは明治3（1870）年6月に来日したが、最初から外交官の仕事と並行して大北電信会社の代表としても動き始めた。まず、大北電信会社の事業のことを説明した書簡を外務省へ送り、外務省に面会を依頼した。その後、交渉が始まった。面会には、日本側から、初代外務卿の沢宣嘉、及び参議の寺島宗則が出席していたが、電線施設についての交渉はかなり長引き、結局3ヵ月間もかかってしまった。

沢と寺島は、国際電線が日本まで届くということ自体には非常に積極的な立場をとっ

ていたが、当然日本の権利を守らなければならないという必要性も強く感じていた。だから、許可を与えるには与えるつもりであったけれども、同時に日本における会社の権利を最小限にしようとしていた。この問題を解決するのに相当時間がかかり、衝突もあったが、結局9月末に契約が成立した。

もともと外交官のシックが同時に自国の会社の代表をするということは、当時、寺島もそれに対してかなり疑問を感じていたようである。寺島はイギリス公使のパークスに相談してみたが、それは契約署名式の後のことで、もはや遅かった。これはずるい話であるけれども、パークスもシックと秘密裡に相談していたので、パークスが寺島の立場をサポートするはずがなかったのである。寺島が疑問を感じるのは当たり前のことであるが、結局、彼はまだ外交経験が足りず、列国の外交官にだまされる余地がまだ十分あったと言わざるを得ないのである（川野辺1993）。

それは別として、契約が明治3年末に成立し、翌明治4（1871）年に上海と香港を結ぶ海底電線が開通、それからウラジオストクと長崎を結ぶ海底電線、また長崎と上海を結ぶ海底電線がそれぞれ敷設され、明治5年元日に長崎とヨーロッパを結ぶ電信線が開通した。結局、大北電信会社の事業は成功を収めたのである。

さて、繰り返しになるが、岩倉使節団が明治6年に大北電信会社の本部を訪れたのは、その2年前の明治4年に大北電信会社と明治政府とが契約を結び、明治5年元日に長崎を通して日本が国際電信ネットワークに入ったという事実を踏まえてのことであった。

『米欧回覧実記』に、久米邦武はデンマークのことを次のように書いている。「我が日本へも条約し、上海と長崎との海底線を設けたるほどなれば、その盛んなることを想像すべし」。今まで見てきたように、大北電信会社は日本でも活躍するようになったわけであるが、ケーブル敷設と電信経営は、当時として大事業であったに違いない。その大事業を発展させるために、大北電信会社はデンマークで人材を集めて、十数人の若い男性をイギリスへ派遣している。そして、イギリスで電信業の英語の訓練を受けさせてから、デンマークの軍艦に乗せてロンドンを出発した。

その軍艦はトルデンスキョルド（Tordenskjold）号と言って、3艘のケーブル敷設船と一緒に、デンマークの船として初めてスエズ運河を通過して、上海に向かった。上海で、若いデンマークの技師たちはケーブル敷設の仕事で多忙だったようであるが、1871年の4月18日に、ようやく上海—香港間に敷設した海底ケーブルが開通した。そして、彼らは上海ですることがなくなったので、日本へ派遣された。

大北電信会社が敷設したケーブルが一旦長崎に届くと、日本と中国、ヨーロッパを結ぶ電信のコミュニケーションが始まる出発点となった。長崎の拠点は電信の設備や、電信受け入れの事務所だけでなく、デンマーク人の電信技師が生活する宿舎も必要となった。そのために文久3（1863）年に長崎に建設されたベル・ビューホテルの用途を変更して、長崎の電信局を兼ねる宿舎となった。その後、大北電信会社は長い間長崎で活躍していて、戦後になっても連合軍の最高司令官の命令によって、会社の拠点は相変わらず

長崎になっていた。

こうして大北電信会社は日本でいろいろ活躍していたのであるが、時期としてはまさに岩倉使節団がデンマークを訪問した時期と重なるわけである。そこに注目していただきたい。『米欧回覧実記』や岩倉使節団の動きにあまり集中し過ぎると、知識や情報の流れが一方通行のようなものに見えるおそれがあると私は考えるのである。

先ほど述べたように、岩倉使節団の行動や『米欧回覧実記』の記録を見ると、イギリス、フランス、ドイツなどと同じようにデンマークにも日本の資料が既に博物館に陳列してあったり、日本に足を踏み入れたことがあるデンマーク人も相当いたり、また日本にデンマーク人が100人ぐらい住んでいたりしていたわけである。なお、久米邦武もある程度そのような事実を認めていた。言い換えれば、情報と知識が一方通行になっていたわけではないのであるから、ここで岩倉使節団から目を離して、むしろ日本におけるデンマーク人の活躍、それからデンマーク人による知識の追求と生産に焦点を絞って話を進めていきたい。

さて、前に言及したように、長崎の元ベル・ビューホテルには、大北電信会社の若いデンマーク人の技師たちが十数人住んでいた。その技師たちの中に一人、非常に優秀な人物がいた。その日本語能力、またその学問のレベルを考えると、あの有名なイギリス人のアーネスト・サトウと匹敵するくらいの人物だったと言っても大げさではないと思われる。

その人物とはウィリアム・ソフス・ブラムセン（William Sophus Bramsen）である。彼は、どのようなきっかけがあって日本にたどり着いたのか。また、なぜ日本学に挑戦したのか。それから、彼の知識と情報の収集方法の裏にどのような問題が隠れているのか。まず、その経歴を見ておこう。

ブラムセンの父は冒険家のような人で、若いとき海外で数年にわたって実業家をし、それから帰国して、1864年に新デンマーク火災保険会社という会社を設立している。長男のウィリアムも冒険的な性質だったようで、ある日、大学の学生食堂で「俺は中国へ行くよ」と叫んだという逸話が残っている。いずれにしても彼は大学を卒業しないまま退学して、早速、大北電信会社に入社した。彼はすぐ、同時に大北電信会社に入社した連中と一緒にイギリス北部のニューカッスルに派遣され、そこで電信技師としての訓練を受けてから上海へ向かった（Bramsen 1949, Bramsen 1964）。

一旦海底ケーブルが長崎まで敷設されたとき、つまり明治4年の8月に、ブラムセンなど7人のデンマーク人が長崎に派遣され、例のベル・ビューホテルが宿舎兼仕事場となった。明治5年1月1日から会社の長崎支店がオープンしたが、当時は長崎と東京のケーブルがまだ敷設されていなかったので、最初の1年間はあまり仕事がなかったとのことである。

その後、ブラムセンは大北電信会社の仕事を辞めて、日本電信電話公社に移った。なぜそうしたのかは、今のところわからない。おそらく東京へ移って、長期的に日本に滞

在するつもりだったのではないかと思われる。既に日本人の恋人がいて、長崎でも同棲していたが、結婚まではしなかった模様である。当時としては、外国人と日本人との関係について典型的なパターンである。それも東京へ引っ越した動機と関係があるのではないかと思われるが、詳しいことはまだわかっていない。

それから、明治 8（1875）年に突然、三菱郵便汽船会社に入社している。これには、三菱の取締役になっていたデンマーク人のクレブスの影響が間違いなくあったと思われるが、それも裏づける資料がまだ見つかっていない。ブラムセンが三菱に入社するとたちまち、彼の能力が認められることとなった。つまり、当時の三菱は頻繁に裁判に巻き込まれていて、その関係でブラムセンは居留地の領事裁判所で活躍するようになったのだ。言うまでもないことであるが、それは彼の優れた英語力なしではとてもできないことで、それに加えて、法律にも非常に詳しかったとのことである。結局、三菱の幹部は、ブラムセンをロンドンへ派遣して、法律を学ばせ、弁護士の資格を取得してもらうに越したことがないと判断した。ブラムセンの送別会は、上野の精養軒で催された（『東京横浜毎日新聞』明治 13 年 10 月 22 日）。

ブラムセンはその後、明治 13（1880）年 10 月 23 日に三菱の奨学金をもらった 3 人の留学生と一緒に船に乗ってロンドンへ出発した。少し付け加えると、その 3 人のうちの一人が輸入食品専門の明治屋を設立した磯野計という人物で、もう一人は東京のイギリス法律学校を設立した増島六一郎であった。実はブラムセンと増島は下船後、一緒にミドル・テンプルというロンドンの法律学校に入学した。とにかくこうしてブラムセンはロンドンで法律を勉強するようになったが、明治 14 年の 12 月、ブラムセンはロンドンで突然病気になって、12 月 8 日に腹膜炎のため夭折した（『明治屋百年史』1987）。

長崎時代のブラムセンに話を戻すが、ブラムセンが日本語を勉強して日本学に没頭するようになったことは間違いないのであるが、そのきっかけは何だったかというと、何と日本の古銭、つまりコインだったようである。ブラムセンの友人の回想録によると、ブラムセンは長崎で死に物狂いになって日本のコインを買い集めていたそうである。しかし、彼は単なるコレクターとしてだけではなくて、むしろ日本史のモノ史料としてコインを見ていたようである（Nagashima 2012, 40-42）。

ブラムセンはなぜコインに集中していたのであろうか。実は、日本文化を代表するモノ史料として西洋人がコインと書籍を集めるという現象は、元禄時代まで遡る。出島のオランダ商館に滞在したオランダ東インド会社の役人のインテリにとって、日本の書籍とコインを調査することは、すでに一般的になっていたと言ってよいと思われる。あの有名なケンペルも、元禄時代に医者として来日したが、日本の古銭が彼の視野にあり、大英図書館に所蔵されている彼の自筆手記の中に、小判や一分金のコインを写したペン描きの古銭図が残っている。なお、ケンペルの「日本誌」という名著にも、日本貨幣の古銭図が掲載されている（コーニツキー 2005）。

また、ケンペルと同時代のオランダ人で、デ・ヤーゲ（de Jager）という人物もいて、彼

は一度も来日しなかったが、バタヴィアの東インド会社本部に長年勤務していて、日本に結構興味を持っていたようである。彼が出島へ送った書簡も大英図書館にあるが、その書簡によれば、彼は日本についての情報をいろいろ求めていて、その書簡の末尾に「金貨、銀貨、銅貨を問わず日本の貨幣のことも調査するのを忘れないでくれ」と付け加えてある。デ・ヤーゲも古銭を日本文化のモノ史料と見ていたようである（Kornicki 1993）。

もう一つの例として、安永年間に来日したツンベリーというスウェーデン人が、日本では植物学者として有名であるが、植物だけではなく、貨幣にも詳しかった。帰国してから日本の貨幣についての単行本まで出している。原本はスウェーデン語であるが、その後ドイツ語版やオランダ語版も出版されている。これは、日本の貨幣を本格的に紹介した最初の文献で、図版の貨幣は全て彼が密かに輸出したものである。コインを国外に持っていってはいけなかったのであるけれども、彼は靴の中に入れて密かに輸出したため、現在そのコインがウプサラ大学の貨幣部に所蔵されている（コーニツキー 2005）。

また、天明年間にオランダ商館の商館長を務めた有名なティツィングも、2,000 枚ぐらいの古銭を集めたり、福知山藩の 8 代藩主で古銭学者としても有名になっていた朽木昌綱などと交友を持ち、昌綱が著述した古銭についての著作を、ティツィングがオランダ語に翻訳するなどして、熱心に日本の貨幣史を研究していたことは事実である。

そのほか、詳しくは述べないが、クラップロットとかブロムホフとかフィッセルとかシーボルトなどの来日ヨーロッパ人も、みなそれぞれ日本学の一部門として貨幣の歴史を重要視していたことは否定できないのではないかと私は考える。ブラムセンが日本の古銭を集めたり貨幣史を研究したりしていたことは、当時としてはごく自然なことであった。

言うまでもないことであるが、日本でも江戸中期から古銭に対する興味が一般化していて、古銭収集のマニアも見られ、また収集家が集まって、お互いに古銭を評価し合ったりしていた。古銭コレクターをテーマにした「愛古銭」という番付も印刷された。現存している最古のものは嘉永 6（1853）年であるが、おそらくその前にも出されていたのではないかと思われる。また、この番付に現れている地名を見ると、江戸だけではなく、松坂、奈良、久留米、肥後などとあり、古銭収集のマニアが幕末までにほぼ全国的な規模になっていたことが明らかだ。

明治になっても同じタイプの番付が毎年印刷されていたようで、明治 13 年版の「愛古銭」に何と 4 人の外国人の名前も欄外に出ていて、外国人も日本の古銭を調べていることを日本の古銭会が認めるようになったことを物語っている。その欄外のリストを見ると、ブランセンの次に載るシーボルトは、ハインリッヒというシーボルトの息子の方で、彼が集めた古銭は今、ドイツのイェーナに保存されている。次のヲーステンは明治 8 年にドイツ公使館の通訳見習いとして来日して、10 年間滞在してから帰国したらしく、彼のコレクションはどこにあるかわからなくなってしまっている。最後にセッケンドルであるが、彼は海軍士官候補生として明治 12 年 6 月から 1 年間、当時日本に滞在していたハインリヒ・フォン・プロイセン王子の同伴者として来日して、後にドイツの海軍中将

になっているが、彼が集めたコインも今どこにあるかわからない。

なお、明治13年版の「愛古銭」に北方探検家の松浦武四郎とか成島柳北とかがリストアップされている。柳北は、コレクターとして同じ趣味の連中を集めて、「月旦古泉会」というグループを形成した。その中心人物が柳北だったことは明らかである。明治11年から月1回の割合で、「月旦古泉会」のメンバーたちが集まって、順番に会主を務めて、古銭の話をしたりして、後に「月旦衆評泉譜」という同人雑誌を出していた。この「月旦衆評泉譜」は、今、国会図書館とデンマーク国立博物館にしかない非常に珍しい史料で、なぜデンマーク国立博物館にあるかといえば、例のブラムセンがメンバーになっていたからである。外国人メンバーはブラムセンだけであった。

ブラムセンは明治11（1880）年から13年までの2年間、「月旦古泉会」に参加して、40回以上、彼が所有していたコインを紹介して、それが後に「月旦衆評泉譜」に掲載されるようになった。また、ブラムセンは2回ほど会主を務めている。このような資料はどういう意味があるのかといえば、一つはブラムセンが日本人の古銭世界の専門家と話ができるほどその日本語能力が上達していることと、それから彼自身も古銭学者やコインのコレクターたちの仲間入りができていたことを物語っているのではないかと私は考えるのである。

「月旦古泉会」のメンバーに鬼頭久吉、それから畠山如心斎という人物もいて、鬼頭の方は古銭関係の業者で、ブラムセンが鬼頭から多くのコインを買い入れた記録がデンマークに残っている。ブラムセンが明治13年に日本を立つ直前に鬼頭からもらった手紙によると、鬼頭がお土産にブラムセン「先生」に珍しいコインを1枚プレゼントして、手紙の中でそれについての説明を付け加えている。同じ明治13年には、畠山如心斎が「ブランセン大先生」にコインの拓本の書物を与えている。畠山如心斎という人物は、成島柳北に次いで「月旦古泉会」の中心人物の一人で、幕末に国学者として活躍して、物語文学、和歌などの著書を残したが、同時に幕府の学問所で論語の講釈もしていて、安政4（1857）年に幕府の命令で、蕃書調所で蘭学や英学を修め、後に徳川慶喜の前で蘭書や英書について講釈している。明治になってからは、彼は骨董品の世界でいろいろ活躍していたようである（渡辺刀水1986）。

若きブラムセンにとって、コインの研究がメインだったことは多分間違いないと思われるが、古銭のことを研究するに当たって、当然ながら日本、中国などの年号が分からないと駄目であるし、日本の伝統的な度量衡にも精通していないといけないわけである。そういうことは当たり前のことであるが、当時の日本在留西洋人はほとんど門外漢だったのではないだろうか。

ブラムセンの性格といえば、なるべく詳しく調べるタイプだったようで、年号や度量衡の問題も真面目に勉強したことは、彼らしいことと思われる。実は、アーネスト・サトウが明治7（1874）年に *Japanese chronological tables* という本を出しているが、それは日本についてだけで、例えば慶應元年元日が西洋暦で何年何月何日に該当するかという問題

は全然取り上げていない。また、内務省が明治6年から出した『太陽太陰両暦対照表』も、グレゴリオ暦が1582年以前には使用されていないことを全く無視したわけで、それ以前のデータが完全に間違っているということをブラムセンは指摘した。ブラムセンが作成した『和洋対暦表』は当時非常に性能が高くて、一番正確だったという評判だった模様である。英語版も存在していた。

外国人による日本研究が明治初期の居留地の世界で発足したことは、かなり広く知られている。当時の日本研究の場と言えば、明治5年に設立された日本アジア協会、それから次の明治6年に設立されたドイツ東洋文化研究協会がメインだったと考えられる。ブラムセンは両方に参加していたようであるが、どちらかというと、日本アジア協会のほうでの活躍ぶりが目立っている。入会してから彼は各会の発表後の議論に参加していたようである。

また同時に、当時の英字新聞に何回も自分の意見を書いた書簡を寄せたりしていた。たとえば明治10（1877）年には、アーネスト・サトウが提案した日本語のローマ字方式に対して、ブラムセンが反対した文章を新聞に寄稿している。これは何を意味するのかと言えば、実は、サトウの提案によると、日本語のローマ字方式の基盤は日本語の発音ではなく、むしろ仮名遣いのつづりを基本にするべきだという主張で、同僚のイギリス人、ジョージ・アストン、バジル・チェンバレンなどが賛成している（*The Japan Weekly Mail*, 29 December 1877, p. 1193.）。

ただし、ブラムセンが指摘したように、そのようなローマ字方式だと非常に不便なローマ字のつづりになることが多く、例えば万葉集は「Man'efushifu」となる。つまり、明治初期の発音と全く関係がないローマ字のつづりになってしまうのである。それは確かに当時の仮名遣いを反映していることは反映しているが、結局役に立たないとブラムセンは主張している。彼は、いつも当時の発音を基にしたローマ字方式を使っていたのである。

ブラムセンの主張は、日本アジア協会の会合でいろいろ議論されたが、結局結論は出なかった。ただ、明治19（1886）年にアメリカ人宣教師のヘボンが編集した有名な和英辞書の第3版が出版されて、その際、ヘボンが初めていわゆるヘボン式のローマ字方式を導入して、それ以来、ヘボン式が一般的になって広く使われるようになった。言うまでもないことであるが、そのいわゆるヘボン式はアーネスト・サトウが提案した方式ではなく、むしろブラムセンが主張した発音を基にした方式であった。和英辞書が出た明治19年といえば、ブラムセンは既に他界していたが、彼が一生懸命主張したローマ字方式が主流になったことは事実である。

今まで見てきたように、岩倉使節団のデンマーク訪問は大北電信会社の事業と深い関係を持っていたが、その会社の技師にブラムセンという若いデンマーク人がいた。使節団がデンマークのことを調査していた時期は、ちょうどブラムセンの来日と重なっていた。デンマークが使節団にとって見知らぬ土地だったのと全く同じように、ブラムセンにとって日本も見知らぬ土地だったと言えるのではないだろうか。しかし、それだけで

は決して結論にならない。

ここで、少し回想をさせていただきたい。およそ20年前に『米欧回覧実記』全5巻の注釈つきの英訳が出版された。及ばずながら私がデンマーク、スウェーデン、ロシア、イタリアのことが書いてある第4巻を担当した。そのときに、なぜ使節団がアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスだけでなく、北欧、ロシアへも行ったのかと不思議に思っていた。しかし、翻訳をしながら、目的地に寄ってみると、それぞれ使節団の目的、反応、評価などが大分違っていたことが浮き彫りになった。ただ、その原文の翻訳には、私は非常に苦労した。それは、片仮名の人名の本名を探すことが大変であったからである。また、辞書に出てこない単語も沢山あり、久米の説明の間違いもあったりして、それらを考えると、明治初期の日本人にとっても決して読みやすいものではなかったはずだ。

今、その読者の問題を考慮に入れながら、ブラムセンの業績を改めて考えてみたい。まず、なぜブラムセンが来日したかという問題を最初に取り上げるべきだと思われる。それは当然、大北電信会社の従業員として来日したのであるが、それは大北が日本をヨーロッパの技術的・経済的ネットワークに取り入れようとしていた事業で、ブラムセンはその事業に参加していた一員であった。日本側は、決してデンマークの電信ネットワーク参加に反対していたわけではないが、外国がそれを牛耳ることに対して躊躇していたことは、当然と思われる。ただ、ブラムセンは、おそらくそのようなことを少しも考えなかったであろう。彼にとっては、ヨーロッパの会社がアジアで好きなようにするということが当たり前だったのではないだろうか。

日本に到着したブラムセンは、すぐコインの研究に没頭したが、彼の知識追求姿勢はいろいろな問題を抱えていると私は思う。先ほど述べたように、ブラムセンは日本のコレクターたちと付き合ってはいたが、そのほかでも日本の古銭書の写本や刊本を集めていた。そのコレクターたちから、ブラムセンが習ったことは非常に多いはずであり、また古銭商から知識をたくさん得たことも当然と言えるだろうが、ブラムセンは日本側の知識を一切認めていなかった。それどころか、活字になったブラムセンの論文の一つに、日本の古銭商は足りないところがあり、手に取るほどの価値はないとまで断言している(Bramsen 1880)。結局、ブラムセンは、日本人が蓄積してきた知識を咀嚼して、それを自分一人の研究成果として見せかけていたと言っても過言ではない。

その発言の裏に、当時のヨーロッパの科学的な古銭学のほうが優越しているという確信をブラムセンは持っていたかもしれない。しかし、ブラムセンがその科学的なアプローチを明治の古銭学者とシェアしようとした形跡は全くない。つまり、彼は協力的な立場をとってはおらず、むしろ独善的な態度が見受けられるのではないかと思われる。また、ブラムセンが「大先生」と呼ばれたのも少々おかしなことである。それは外国人に弱い明治初期の人々の態度が反映されているのか、あるいは彼が大抵の西洋人に比べて日本語能力や古銭の知識が優れていたことを物語っているのか、それとも古銭学への科学的

なアプローチが評価されたのか、いずれか不明なのであるけれども、ブラムセンは、日本人の蓄積してきた知識なしでは、それほど古銭学者として大成できるはずがなかったと私は考えるのである。

いずれにしても、当時の在日西洋人日本学者が、ほとんど同時代の日本人の援助や知識に頼っていたことを全然認めていないことは共通しているところである。このようなヨーロッパ中心の知識追求姿勢は、既に伝統が長く、18 世紀にスウェーデン人植物学者のリンネも、ヨーロッパの植物学の分類を世界に当てはめようとして、ヨーロッパ人を各国へ派遣して植物を収集し、後にヨーロッパの植物学の資料にしていたことは有名であるが、その大事業の中に各地の植物学の伝統や知識を含める余地が全くなかったということはよく知られている。あくまでもヨーロッパ人の事業だったわけである。しかし、ヨーロッパ中心の事業になっていた植物学と違って、初期の西洋人日本学者の業績は、あくまでも日本学、あるいはいわゆる東洋学という部門から逃れることは決して簡単ではなかった。まず西洋での読者数が少なく、また西洋の学問にはほとんど影響を及ぼしていなかったと言わなければならない。

それはブラムセンの古銭学だけではなく、同じようにアーネスト・サトウなどが、世界の印刷の歴史が 15 世紀のグーテンベルクから始まるどころか、それ以前に中国、朝鮮、日本などに印刷の事業が既にできていたことを指摘しても、ヨーロッパ中心の定説がなかなか動かなかったこととも通じている。結局、海外で蓄積された知識は西洋人の知識系列に入りにくい面があって、その知識系列に挑戦しようとしても、海外の知識は無視されたり、例外と除外されたりする運命にあった。古銭にしても印刷にしても文学にしてもヨーロッパ中心の知識系列は、アジアの知識をなかなか受け入れようしなかったことは周知のとおりだ。日本人の知識を認めなかったブラムセンであるが、彼の業績がヨーロッパでほとんど無視されてしまったのは皮肉というか天罰というか、とにかく当時の西洋人による日本学の日本人に対しての態度、またヨーロッパ中心の知識系列の排他性も同時に浮き彫りにしてくれるのではないかと私は考えるのである。これは 19 世紀の話であるが、ある意味で日本学をグローバル化する事業はまだ継続中と言わなければならない。そうした意味において、これから日文研に期待するところはまだ大きいと思われる。

参 考 文 献

川野辺冨次「英国公使との事前取極による伝信機条約――大北電信会社ケーブル陸揚げの問題」『交通史研究』第 30 号、1993 年。

ピーター・コーニツキー「ヨーロッパ人による日本古銭と古銭書の収集――江戸時代を中心として」『出土銭貨』第 23 号、2005 年。

鈴木良隆「初期三菱における外国人について」『三菱史料論集』第 1 号、2000 年。

長島要一「大北電信会社の日本進出とその背景――シッキ公使の来日」『日本歴史』567 号、1995 年。
長島要一『日本・デンマーク文化交流史――1600-1873』（東海大学出版会、2007 年）。
三菱社史刊行会編『三菱社誌』（東京大学出版会、1979 ～ 1982 年）。
『明治屋百年史』（明治屋、1987 年）。
渡辺刀水「畠山梅軒」『渡辺刀水集』第二巻所収（日本書誌学大系 47/2）（青裳堂書店、1986 年）。

Bramsen, Bo. *Bogen om Luis Bramsens efterkommere: en familieoversigt gennem merer end 100 aar* ([Copenhagen]: privately published, 1949).
Bramsen, Bo Viggo. *Luis Bramsen. En københavnsk forsikringspioner. Forsikringsaktieselskabet Nye Danske af 1864. 100-ans jubilæet* ([Copenhagen: author, 1964]).
Bramsen, William Sophus. *The Coins of Japan; Part I The copper, lead and iron coins; reprinted, with modifications, from the Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* (Yokohama: Kelly & Co., 1880).
Kornicki, Peter, 'European japanology at the end of the seventeenth century', *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 56 (1993): 502–524.
Kume, Kunitake. *The Iwakura Embassy 1871–73: A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe*. Edited by Graham Healey and Chushichi Tsuzuki, vol. 1–5 (Matsudo: The Japan Documents, 2002).
Nagashima Yōichi, *De dansk-japansk kulturelle forbindelser 1600–1873* (Copenhagen: Museum Tusculanums Forlag, 2003).
Nagashima Yōichi, *De dansk-japansk kulturelle forbindelser 1873–1903* (Copenhagen: Museum Tusculanums Forlag, 2012).